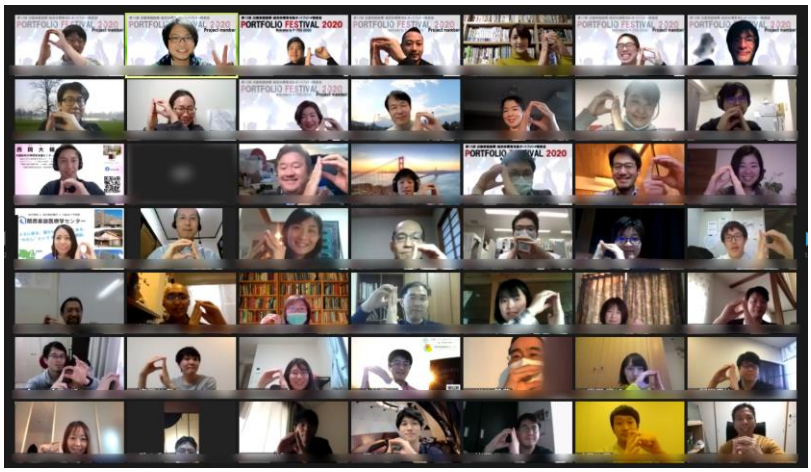
日本プライマリ・ケア連合学会
近畿ブロック支部

発行人：雨森 正記
事務局　〒550-0001　大阪府大阪市西区
土佐堀１-４-８　日栄ビル 703 A
あゆみコーポレーション内
Tel.06-6441-4918　Fax.06-6441-2055
E-mail　jpca@a-youme.jp
HP　primary-care.or.jp/primarycare-kinki/

ニュースレター　*No.31（2021.3）*

報告：第 13 回近畿家庭医療・総合診療専攻医ポートフォリオ発表会（P-FES 2020）2021 年 2 月 21 日開催！

P-FES 2020 実行委員代表　小林　正宜（大阪・葛西医院）



コロナ禍で開催が危ぶまれた近畿ポートフォリオ（PF）発表会ですが、多くの先生方のご尽力のお蔭で、オンラインという形で開催することができました。新しい形で開催するにあたり、専攻医への負担を減らすことや専門医の横のつながりを強化するという意味も込めて、専門医を中心とした若手家庭医・総合医 10 名（天野雅之、稲岡雄太、大谷紗代、官澤洋平、草野超夫、合田建、橋本忠幸、松島和樹、森川暢、小林正宜）が実行委員を務めました。

今回はエントリーした専攻医の詳細事例報告書を事前に評価し、点数の高かった上位 7 名に加えて他職種 2 名（看護師、薬剤師）が当日に PF を発表し、視聴者の評価をもとに上位 3 名を表彰するという形式を取りました。PF 発表の間に鈴木富雄先生によるポートフォリオ座談会や、西岡大輔先生による SDH(健康の社会的決定要因)レクチャーもあり、非常に好評でした。

試行錯誤した甲斐あって、42 名に上る専攻医からのエントリーがあり、30 名もの指導医が詳細事例報告書の評価にご尽力くださいました。当日は全国から 120 名を超える参加者にご視聴頂き、13 時から 17 時という長丁場にも関わらず、多くの方が最初から最後まで熱心にご視聴してくださり、専攻医や視聴者のみならず、指導医の先生方からも「楽しみながら勉強になるとても良い会だった」といったご意見をたくさん頂戴しました。「コロナ禍でも後輩たちを育てたい」という教育熱が我々の結束力を高めたのだと感じました。引き続き専攻医がより良い教育の機会に恵まれるよう、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

特集１：近畿の話題（今回は大阪、奈良からお届けします）

中小病院の COVID-19 への対応

大島　民旗（大阪家庭医療・総合診療センター／西淀病院）

当院は内科二次救急告示病院で、家庭医・総合内科医が一定数所属しており「幅広く断らない外来診療」を掲げていた。COVID-19 に対しては結核と同様「診断と専門治療施設への転送までが当院の役割」と一致は得られた。はじめて陽性患者を診断したのが 3 月 9 日、大阪府全体の陽性者はまだ 55 名であった。そして 4 月 5 日に発生した初の入院患者が夜間に挿管となり、うわさに聞いていた「みるみる悪化する」疾患との対峙が現実となった。とにかく院内感染を避ける（職員・入院患者を守る）ことと、発熱患者を断らずに診る（地域のニーズに応える）ことの両立に相当腐心したが、幸い管理部も大きくそのスタンスがゆらぐことなく、例年の 1.2 倍の救急搬送を受けてきた。発熱患者の診察場所も病院内のゾーニングから病院外の陰圧テント→プレハブ設置と、どんどん出世した。入院治療も、確定診断がつかなければ転院できないため、肺炎の疑わしい患者はひとまず個室隔離で PCR を提出とした。結果が出るまではコロナと同様の PPE が必要とされるため、看護労働が特に汲々とし、同一法人診療所などから応援をもらいながら乗り切っていった。現在までのところクラスター発生なく、コロナに関わる専門職の退職もないことに深く感謝である。そしてより地域の中の困難への意識を強め、フードバンクの定例化にいたっている。私自身マスコミの取材も受けることが多くなったが、とにかく望みは「心の休息」、コロナのことをあまり心配しなくて業務ができる日が来るのを願ってやまない。

ハイブリッド型の総合診療医：へき地診療所と急性期病院での家庭医療学の実践

天野　雅之（南奈良総合医療センター総合診療科）

この数年間、「週 3 日をへき地診療所で、週 2 日を同一医療圏の急性期基幹病院で過ごす」という貴重な経験をさせていただきました。この“ハイブリッド型”の働き方は人口減少の著しい地域の一つの支援策になり、教育効果も高いと感じました。執筆の機会をいただきましたので体験を共有いたします。

①医療圏全体に関わることができた

診療所かかりつけ患者を病院でも継続診療したため退院支援もスムーズでしたし、村民の安心に繋がりました。院内外のスタッフや行政・福祉と連携しながら村民と対話し、生活の場における病(Illness)の意味や地域での日常生活を支える創意工夫(Creative self)に気づけた経験は私を成長させてくれました。

②病院医師/診療所医師のお互いの気持ちがわかった

医療機関を「内からも外からも」見た経験は、日常臨床の円滑化や専攻医/研修医の教育カリキュラムの改善にも生かされました。個人的にも、「臨床戦略・病状説明・医療文書」といった自らの重点領域(Special interest)との出会いに繋がりました。

当初はこの勤務形態に不安もありましたが、かつてご指導いただいた桑間雄一郎先生(Mount Sinai Beth Israel)が Attending doctor として診療所と急性期病棟を兼務されていた姿をロールモデルとして日々精一杯過ごしました。振り返ればあっという間に過ぎ去り、楽しい数年間でした。今後もこの経験を活かし、自らの研鑽と後輩教育に邁進していきます。

【写真】村の観光名所にて

特集 2：第 34 回日本プライマリ・ケア連合学会近畿地方会のお知らせ

同地方会大会長　鈴木　富雄　(大阪医科大学病院　総合診療科)

お待たせいたしました！昨年 11 月に大阪医大で開催予定のところ、新型コロナ感染症のために一年延期になっていました「第 34 回日本プライマリ･ケア連合学会近畿地方会」ですが、2021 年 11 月 28 日（日）に完全オンラインで行います。テーマは延期前と同じく「地域から輝け　総合診療の挑戦！」ですが、ここではワクワクが止まらない３つの目玉企画をご紹介いたします。

まずは、やはり「新型コロナ感染症に対する地域の挑戦（仮）」です。昨年以来、在宅や介護の現場を含み、診療所から大病院に至るまで、それぞれの場所で感染対策を行いながら診療を継続していくために、様々な取り組みと工夫がなされました。今回は皆様方の実践的経験を共有し、総括した上で、今後まだまだ続くと思われるウイルスとの闘いの展望を、多職種からの視点も入れながら、大いに論じ合いたいと思います。

次に、「健康の社会的決定要因に関する地域の取り組み（仮）」を取り上げます。所得、職業、教育の階層、居住・生活環境、人間関係、ストレス、成育環境、保健医療へのアクセスなど、実に様々な社会的要因が私たちの健康に関与しています。ウイルス禍においても然り、私たちはどのようにこの大きな問題と取り組むべきなのか、行政との連携、地域コミュニティの創成、多職種との協働など、現場における現状と課題に鋭く切り込んでいきます。

そして最後は、「老いも若きも総合診療！（仮）」と称して、医学生からベテラン医まで、学びの意欲にあふれた皆様の期待にガッツリ応える「ドクターG に挑戦 from 大阪（仮）」、「適々斎塾 特別企画」など、近畿発ならではの、皆様のお腹をしっかり満たすスペシャルな企画も用意しております。

コロナ禍にあり、皆様方に直接お会いできないのは大変残念ですが、「自宅や遠方からでも参加できる」、「オンデマンドで後からも復習できる」「これを機に新たな企画のアイデアが生まれる」など、オンラインならではのメリットも多数あると思います。今回は、なんと「参加人数 1000 人！」を目標として、近畿にとどまらず全国各地から多数の皆様方に参加していただけるように、実行委員一同、深くて楽しい学びに溢れた素敵な秋の一日になるように尽力しております。
2021 年 11 月 28 日（日）、皆様方のご参加をお待ちしております！！

［支部からのご連絡］　**ブロック支部活動について皆様からのご意見やご提案をお待ちしております！**

近畿ブロック支部・各府県支部・公認グループ活動のホームページが更新されました！

http://www.primary-care.or.jp/primarycare-kinki/　　是非、アクセスしてみて下さい.

（学会トップページ　http://www.primary-care.or.jp　上部メニュー「講演会・支部活動」から）

→ 詳細は、上記ホームページをご参照願います.

ホームページ担当：梶原信之